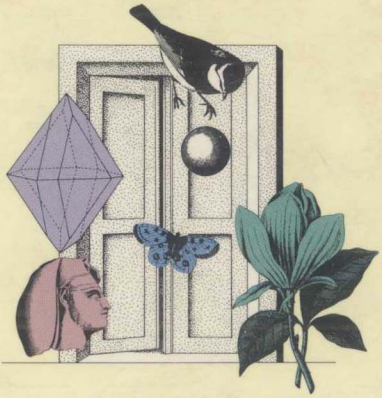
成城だより

II

大岡昇平



文藝春秋

成城だより
II

大岡昇平

文藝春秋

著者略歴

明治四十二年東京に生れる。京都大学仏文科卒。昭和十九年応召、二十年ミンドロ島で米軍の俘虜となった時の体験から執筆された「俘虜記」は戦後文学の代表作の一つとなる。「野火」「武蔵野夫人」「花影」「レイテ戦記」「中原中也」ほか著書多数。

成城だより II
昭和五十八年四月三十日　第一刷
昭和五十八年五月三十日　第二刷 Printed in Japan

定価　一〇〇〇円

著者　大岡昇平（おおおかしょうへい）
発行者　西永達夫
発行所　株式会社　文藝春秋
東京都千代田区紀尾井町三―二三
電話（〇三）二六五―一二一一
印刷所　精興社
製本所　矢嶋製本
万一、落丁乱丁の場合はお取替致します
©ŌOKA SHŌHEI 1983

成城だよりⅡ《目次》

1 犬のいる正月 7
2 寒中数学 31
3 見ざる、聞かざる、歩けざる 58
4 坂上人影 76
5 「愛する女であれ」 102
6 咎め立て 127

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

7 重たい夏 149
8 八月十五日 176
9 ひどいことになって来た 200
10 旅と腹立ち 227
11 「声なき叫び」 252
12 それはさうにちがひない 270
後記 294

裝丁——坂田政則

成城だより II

1　犬のいる正月

一月一日　金曜日　晴

大晦日の二三三〇より〇五二六まで、『新潮』中村光夫「時の壁」三四〇枚読了。彼として恐らくはじめて学生時代の左翼運動の経験を書きたるもの。昭和初年の街頭ルポの状態、平明に書かれあり、大人の文章なり。両親の不和、別居に至る家庭の状況、西片町小町といわれた美貌の姉について「二、三人の学生がふり返った」とだけ、家庭的謙遜と抑制をもって描く。スパイ容疑事件あり、裏切られた上級の友人の粧われたる告白をして死すまでのいきさつが、平明に物語られる。

中村は若年より告白を忌み嫌った男で、家庭の事情につきては、友人は彼の言辞の端ばしにより、またはうわさによる推測を出ず。例によって人物あまりにも相手を見抜きっこする癖ありて、劇的盛り上りはなきも、それだけ客観性を獲得しつつあるもの如し。旧友の肌に触れたる如き感じして、快き年越しの時間をすごす。

それより一〇五〇まで眠って、老妻とさし向いの新年となる。お目出度うの言葉も出ず、おせちも作らず、門松も日の丸も出さず、ひっそりした休日とす。

年末と新年は連続し、殆ど同じものなり、とは毎年かわらぬ感想なり。われ一昨年末、懸案の「富永太郎全集」を片づけるため、この発表日記を一年休むと宣言し実行しありたる間に、多くの異変あり、その最たるはアメリカの大統領元西部劇俳優にかわりて、狙撃されても死なず、核先制攻撃とヨーロッパに大量武器配置を決定す。先制攻撃実施のためには、報復攻撃を行うべき、ソ連のミサイル発射基地、攻撃用原潜のことごとくを、一挙にせん滅できなければならないが、いくら技術革新ありとも、そんなことできるとは思われず、困ったものなり、と思っていたら、西欧諸国の反対運動に会って、米ソ談合へ転向す。財政的にも、むりな西部劇の脚本で、お芝居にすぎなかったのだ。ひとり日本のみお芝居に乗って、暮の二十七日に軍事費独立増額決定す。ばかばかしい話だ。

軍事政権の成立にて、ポーランドの春、終る。これは芝居にあらず、現実なり。アメリカはソ連への全面穀物禁輸を制さいとす。国内業者の犠牲においてなり。景気ますます悪くなるべし、その解禁が次の幕となるべし。

さてどっち向いても打つ手なき年の暮よりの延長としての正月、珍らしく暖冬つづき、老夫婦には何よりありがたし。

犬あり、プードル。戌年の正月にたまたま家に犬ありとは語呂合せめけども、娘夫婦の飼い始めたもの、暮の三十日よりあずかったのなり。夫君長田俊雄君の母堂、昨年三月他界さる。毎年、元旦は山梨県大月付近の田野倉へ帰るならいなりしも、今年は帰る家なし。孫瞭(あき)

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

子と親子三人にて、伊豆下賀茂に正月旅行としゃれこむ。その間、犬好きの老夫婦に預け行きたるなり。五ケ月のオス。デデ六年前の四月二十五日に死してより、わが家に犬なし。四十三年の古夫婦に戦中戦後の数年を除き、なきことなり。犬は先に死ぬからいや、と称して、新しき犬を飼うことを老妻承知せず。あと二年の命といいつつ六年経ち、この三月六日には七十三歳に達する老亭主にはその危惧なけれども、老妻十歳年下なる上、女子平均年齢七歳長ければ一理あり。心不全、白内障、ひょろひょろ歩き、など七つの病気を持ち、（一年の間に右眼角膜溷濁、糖尿病進行あり）老妻の犬に対すると同じ程度の世話がなければ生きていかれぬ一家の厄介者と化したる亭主には、何もいえない。テレビの「名犬ジョリー」のアニメ番組を見て、欝をやる。昨夏は山にてデデと散歩せし道を歩きつつ、デデの先に行く姿を思い浮べて流涕す。

ところがデデになめられたことのある孫の瞭子、どうしても犬がほしいと親ばかにせがんでプードル来る。時々連れて来て、老夫婦を慰めてくれ、こっちからもでかけるうちに、ありがたや、この暮よりまる四日間、犬のいる正月となりたるなり。

日中暖き時間は書斎にて、『ながい旅』訂正にすごす。もとはデデ深夜書斎の足許にて寝て、執筆の慰めなりしに、いまは深夜起きて仕事することはなく、プードルもまた昼間は寄りつかず。

『ながい旅』は昨年九月十日より、十二月二十九日まで「中日新聞」「東京新聞」に連載し

たるものにて、昭和二十四年B級戦犯として刑死せる岡田資元中将の伝記、というよりも裁判記録なり。心不全の人間がマラソンをやるばかがあるか、と仲間の憫笑を買いつつどうやら終る。昨年九月十七日が三十三回忌にて、その少し前よりはじめる約束あり。元来一昨年中、少なく共、昨年上半期までに、懸案の「富永太郎全集」片づける予定なりしも、旧作の加筆訂正に手間どり、できず。『ながい旅』を順延すること、まったく不可能ではないが、アメリカ側一昨年三十年前の公文書公開す。「中日新聞」裁判記録をワシントンより取り寄せてくれる。「富永全集」、「堺事件」をすませた後にすると、いつになるかわからず。筆者この将軍の法廷闘争に興味を持ってより十五年、取材あらかたすませあり。長男陽(あきら)君はわが恩師小原国芳先生の次女純子さんの夫君なり。これまた一つの縁なれば、この世の縁は片付けてくたばるべしと、一一〇回書く。文献読みと十年ぶりの新聞連載、最初は相当きつかったが、そのうちにふしぎに馴れて来て、すらすら進むようになった。

単行本にするための加筆訂正、普通最低半年はかかるのが例だったが、暖日の昼間より仕事できざれば、暖日続くうちにと心せき、十八日書き終った翌日より始めて、意外にはかどり、ほぼ終了、あと細部の仕上げだけとなった。その他に文芸雑誌新年号にも四本書いていて、あいつの「病弱」は仮病じゃないかとのうわさ立ちありという。

顔色もいいとみなはいうが、中身は糖尿病増悪し(血糖二〇〇台に上昇)、右眼角膜溷濁しあり。よろよろ歩きひどくなり、駅前に向う通りにては、対向車人身事故をおそれてスロ

ーダウンす。やはりぼけ老廃人の扱いにしてほしい。
本年上半期は、小説一つの文債果すほかは、月報、追悼文のほか一切断って、少なく共、本年中に「富永太郎全集」の完成を、元日の誓いとす。それから毎年誓って実行不可能なる、怒らないこと。風邪と次に、これが一番心臓に悪いのなり。

一月二日　土曜日　晴

伜貞一、ゆかりさん、春（はじめ）、茜（あかね）来る。茜二歳、わけのわからぬ幼児言語を喋り散らす。二年前の春と同じなり。彼等は何を「物語」っているのか。
二日は子供日にて、伊豆へ行った娘たち親子三人帰り、じいさんばあさん合せて九人にて共歓のはず、午後三時電話あり。伊東より大渋滞にて、いつ着けるかわからぬという。やっと午後九時到着。伜夫婦は少し前に帰る。娘夫婦も十時すぎ帰る。瞭子、プチ（犬の名）おじいちゃんに馴れあるに、嫉妬の色あり。

一月五日　火曜日　晴

寒気漸く到る、寝床より出られず。九月よりのマラソンにて、読み損っていた本たまりあり。その一つは安岡章太郎『流離譚』上下、二日がかりで読了。安岡嘉助、覚之助の行動にて、拙作『天誅組』、「保成峠」「檜原」における大鳥圭介に係わる部分、覚之助落命まで読

みあり、あとは正月にとってあった。通読すれば東北弁を話す親類来訪する導入部より、盲目に近いその父の正凞の感動的な手紙に終る「流離」の構造に感歎した。

安岡家は土佐藩の郷士の株を買ってから、勤王党志士、板垣退助の迅衝隊員、自由党員まで出していた。一家の歴史を、それぞれの遺した簡単な日記、手紙の紙背にあるものを、公的記録と比べてほぐして行く進行となっている。そして維新史の各瞬間において、安岡家のたれかが、日記か手紙を書いていて、切れ目がない。例えば天誅組に参加した嘉助が六角の獄で切られると、その従弟権馬が富永有隣の亡命に連坐して、松山の獄に繋がる。最も均衡の取れた性格の本家覚之助は、一時勤王党の獄に連坐しながら、板垣の戦闘部隊に従って、会津包囲戦で流れ弾に当って死ぬ。

山北村の安岡本家、お西、お上、お下の四家の者、替るがわる出没して、幕末より明治十年代の歴史に係わる。しかしその後、茫茫百年、一家の多くは山北村を出て、日本全国に流離する。これはあまりにも広く長い日本近代史の流離にと繋がる、この一家は離散と流離によって、公史と融合することができたのである。読後感茫洋たり。

覚之助の属する本家は、その墓のある東北へ去った。土佐を根城に各地に流離するの一つの家系に小説家が出で、一家の私史の維新流動期の歴史と重なる部分をまとめた。これは小説家の日記、手紙の裏を読み取る営為に属し、うわばみの如く歴史を呑みとかす安岡家の私家史が生きた感情をもって甦る。

筆者は『天誅組』を蜂起までしか書いてなく、何となく心残りだったが、もはや安岡嘉助と共に、『流離譚』にとけ込んだ一〇〇頁ばかりで十分である。

一九七五年四月、まだ「天誅組」に未練のあった私は、安岡さんの山北町に残っている郷士の家を見せてもらった。一九七七年からはじまった『流離譚』を用意しておられた頃で、氏の帰国にあわせて訪問した。家は従兄の隆彦さんが管理しておられて、たまに開けに行かれる。門前の一本の樹が大枝を切られて異様な形になっていた。安岡さんが子供のとき落ちたことがあるという門前の池は浅くなっていた。もとはうなぎが取れ、石垣から蟹が這い出したという。海岸の赤岡町が近いからで、門前に開けた田圃の向うにその家並が見えた。広助さんが財をなして、多くの郷士の株を買ったのは、この港町と海との関係からであるはずであった。

家はなんともいえない古び方をしていた。間取りは安岡さんが書いている通りで、左側正面の玄関の右に、かなり広い座敷があり、さらに一段高く藩のお姫様が泊った六畳の間があった。襖のふちが黒く、また太目だったような気がする。それからお姫様が小用を足すおまるをおいた次の間を抜けて、裏へ出ると、明るい茶の間で、そこにも縁があり、台所へカギの手につながっている。そこはそれだけの何の変哲もない間取りであったが、それから裏手へ出て、たしか桑の植っている間を通って小高い見晴らしのいい、高いところへ出る。そこが富永有隣がかくまわれていたという「お上」であった。それから少し戻って、片側に庭が

表まで通っている農家風の中庭を抜けて、もとの家の門前へ出る。その庭には安岡さんのおばさんの由喜さんがおられた。少し恍惚気味の老齢の女性と応対される安岡さんには、あわただしい文壇の付き合いでは見られないやさしさがあった。この三軒の家の組み合せが、何とも古めかしく、奇妙だった。

手紙や日記は、この古い家のこわれた襖や額の裏張りから出て来たものだったので、安岡さんはこんど右手の広い座敷の襖をこわされたという。そこからは吉村虎太郎の文久三年八月二十日付で五条の陣屋から出した手紙、覚之助が同年八・一八政変後出した手紙などが出て来て、筆者はまたもや「天誅組」蜂起後を書こうか、との欲張り心を起す（あと二年の命、と毎年思ってるうちに、いつの間にか六年経ってしまって欲が出て来たのだ）、ただ一つ安岡さんに連載中から注意しようと思って忘れたことがあるので、ここに記しておく。

それは覚之助が、板垣の軍について郡山の東、棚倉へ入った。ここはこれまで戦って来た甲州や日光、宇都宮に比べて、平潟方面の海に近いので、山北村の安岡家で食い馴れた魚にありつくのを楽しみにしている、という条りである。

地図でみると棚倉から平潟方面までは五十キロ十二里ぐらいしかない。しかし棚倉出身の故中山義秀がよくいっていたが、山越えて運ばれて来る魚は、いずれも半分腐っていて、例えば棚倉で鮪を食うということは、鮪にあたって吹出物を出して、二、三日うんうん呻って寝ていることだった、という。覚之助さんも魚を食うためには、平潟方面へ出張しなければ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook